



### 持続可能性を考える

吉備国際大学 社会科学部  
教授 井勝久喜

環境問題や社会課題の解決に向けて、世界的に人材育成の必要性が求められ、国連持続可能な開発のための教育の10年（UNDESD: United Nations Decade of Education for Sustainable Development）が、2005年から2014年にかけて実施されました。UNDESDを受けた日本の国内実施計画ではESDを「私たち一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係の中で生きていることを認識し、行動を変革することが必要であり、そのための教育」と定義しています。つまり、ESDは知識と技能を獲得することを目的としているのではなく、社会転換に向けた行動の推進とライフスタイルの変革に向けた態度の変容を求めています。

ESDで私たちに求められているのは、社会の転換に向けての行動とライフスタイルの変革です。そこで、「環境を守るために、環境にやさしいライフスタイルに変えましょう」というキャンペーンが行われることになります。しかし、ライフスタイルは価値観に基づく生活様式であり、価値観が変わらないとライフスタイルを変えることはできません。さらに、人の価値観は社会的、文化的、経済的背景によって形成されている社会システムに基づいていることから、ライフスタイルを変えるためには社会システムを変える必要があるということになります。

ESDでは持続可能な開発のための教育を行うわけですが、持続可能性を論じるときに注意しなければならないことは、何を持続させるかということです。「経済成長」、「地球生態系」あるいは「現代文明」のうち何を持続させるべきなのか答えを求められたとき、多く人は「地球生態系」と答えるでしょう。しかし、現実の社会は「経済成長」の持続を追い求めています。では、経済成長は持続可能なのでしょうか。経済成長のためには資源・エネルギーの供給と汚染物質の吸収源が必要です。科学や技術の進歩で、経済成長の期間を引き延ばすことは出来ても、終わりのない経済成長が不可能であることは誰が考えても明らかだと思います。しかしながら、現在の社会システムにおいて経済成長を止める政策を実施すると社会システムが不安定となり、社会が崩壊してしまうかもしれないことから、持続不可能であることが分かっているにもかかわらず経済成長を目標とせざるを得ないというジレンマに陥っているのが現状だと思います。ESDは「経済成長」と「物質的豊かさ」を追い求める社会システムを変革するための教育です。つまり、ESDは、持続可能性を求めながら、社会システムの変革を求めるというこれまでにない教育であり、ここに難しさが潜んでいます。

人間の欲望を後戻りさせることは困難だといわれています。市場原理主義の現代文明が物質的欲望を追い求めるものである限り、地球環境は破壊され続けることでしょう。市場原理主義が支配する現代文明では、人間の欲望を満たしながら持続可能な社会を創ることは不可能であり、この社会システムを変えない限り、現代文明はいずれ崩壊することになるでしょう。現代文明が崩壊を始めたとき、人類は多くの苦難を味わうことになるでしょうが、それを乗り越えて新しい文明を作らなければなりません。

大学等環境安全協議会は環境安全の面から次世代の人材を育成する使命がありますが、同時に持続可能な社会づくりに貢献できる人材の育成も求められています。単に環境安全教育だけでなく、科学的知識や技術を人類の福祉に活用するために必要な考え方の教育や倫理教育も取り入れていくことが、環境安全に配慮できる人材の育成にもつながるのではないのでしょうか。